

た。いつ死んでもよい、いつかは死ぬのだと覚悟を決めていたときだけに、日本の敗戦など聞かされても、戦後五十五年、頭の中で考えることすら不可能でした。今、思い出しても納得のいかぬ気持ちです。

二度の召集

長かった軍隊生活

愛知県 嶋田 勇

入隊前の家庭の状況は父母、長女、次女と、私（長男）、弟の六人家族でした。

家業は農業で米作で三反五畝の自家用米がやっとで、私は父の手伝いをやっていました。

昭和十二（一九三七）年春、徴兵検査で甲種合格となり、その年の十二月中旬、役場の兵事係に連れられ神戸の湊川神社に集合しました。ここには各市町村から一名ずつ若者が集められていました。

行先は、朝鮮平壤に駐屯の第二十師団歩兵第七十七

連隊（朝鮮第四十四部隊）第一大隊（半島出身の伯少佐）第一中隊で、初年兵受領の下士官が来ていました。神戸出港、釜山上陸、ニンニクの臭いが鼻につきました。汽車で北上、平壤に着き部隊に入りましたが、本隊は北支に出動中で留守隊で教育係しかおりません。軍曹が班長で伍長勤務上等兵と上等兵が初年兵の教育係でした。

初年兵は名古屋、岐阜その他全国からの寄せ集めで一期の六カ月間にわたる教育が始まりました。生まれて初めての北鮮は零下二十度の寒さがこたえました。

「兵隊と背のうは叩かなきゃ直らん」のたとえがあるそうで、何かにつけてビンタが飛んできました。古年兵が居なかったのが、せめてもの救いでした。

部隊の兵舎はれんが造りの二階建て内務班の窓側にペチカがあり、室内は暖かで春のごとくでしたが、内外の温度差が激しいので呼吸器を病む兵士が多く、凍傷は耳と指が多かったです。防寒被服は支給されましたが初年兵は、寒さに慣れるため着用は指示された時以外は許されませんでした。食事は高粱飯とカレー

うどんがアルミ缶で運ばれました。

六カ月間の教育が終わり、一期の検閲も無事終わり、北支山西省の黄河のそばの大同にいる本隊に合流しました。途中石家荘に寄り、その大きな補給廠で食糧、弾薬の補給を受けましたが、当時、徐州作戦に赴く部隊と錯綜して大同に向かいました。本隊は寺院や民家に分宿していました。昭和十三年三月までの連隊長はあの有名は鯉登行一大佐です。「コイト、コイトで行かりょか鯉登、行けば白木の箱が待つ」と唄われていました。

鯉登大佐の後任の連隊長は眞野乙郎大佐、補充隊長は斎藤正彦大佐でした。

本隊の第六中隊長は黒岩大尉で「鬼の黒岩、蛇の新城」のあだ名の通り厳しく、負傷して予備隊にいても戦闘が始まると、命令がなくても第一線に飛び出してゆくほど恐ろしい人でした。本隊は春四月から夏中は戦闘、冬は駐屯地区の警備（大同付近）で、敵は共産八路军です。特に八路军は騎馬戦が得意で、「コサッ

ク」と呼ばれるくらい上手で、馬の横腹に隠れて人影は見えず馬だけが走っているように見えました。

現在も印象深いのは、ある敵性部落を夜襲した時、コンクリート製のトーチカを攻めました。死に物狂いに撃ってくるのをやっと制圧してトーチカの中に入ったら、足を鎖につながら逃げられなくなっている死体を見ました。話には聞いていましたが実際に見て恐ろしくなりました。

機関銃が曳光弾射撃で敵のいる場所を教えてくれ、「山」「川」の合言葉を交わしながら突撃するのですが、真つ暗闇の中で友軍相撃つ場もありました。このとき名古屋駅前旅館「清駒」の主人の古参中尉が小隊長になって突入しましたが名誉の戦死を遂げられました。

またこんな事もありました。山岳地帯を昼間行軍中、一天にわかに掻き曇りものすごい豪雨に遭遇したことがありました。たまたま谷間を進んでいた機関銃隊が突然流れてきた泥流に押し流され、重機一挺が流された事件が起きました。怒った隊長が、あくまで捜

すよう敵命を下したけれど分からず、遂に紛失した事件を覚えています。

山西の山ははげ山ばかりですから、降った雨は瞬時に流れ下り激流となるので、山西の戦いは八路の他に大自然との戦いでもありました。

昭和十四年十二月、私は初年兵教育要員となり路安の中隊を出発、平壤の留守隊に帰り、間もなく昭和十四年徴集の初年兵が入ってきました。主に名古屋出身兵が多かったです。同時に半島出身の志願兵一五〇人が入ってきました。彼等は志願するくらいですから優秀でした。日本語も分かるし考えもしっかりしていました。

第一大隊長の伯少佐も半島出身でした。昭和十五年十二月、予備役編入。階級は兵長。釜山から広島へ帰り、そこで解散となり帰宅しました。家族皆元気だったのですが米の割り当て供出が厳しく、サツマイモからガソリン作るからといって切りイモを屋根に干した覚えがあります。

昭和十五年暮、結婚して一女をもうけましたが、大東亜戦争が始まったので召集を覚悟しているうち、昭和十七年六月、臨時召集が来て、名古屋の歩兵第六連隊に入隊しました。夏物支給で南方向きを覚悟しました。

昭和十八年一月十三日、宇品を出港しましたが途中で南方向きが変更になり、一月十三日、南支黄埔に上陸しました。一月二十五日、鳳兵団の歩兵第一〇八連隊に編入、第六中隊に配属されました。私は直ちに命令受領者に任命され、三月に伍長に任官、本部勤務となったので第一線勤務は少なかったのです。

昭和十八年七月一日、軍令第三十六号による編成が開始され、十八年兵受領のため内地に行くことになり、十一月二十九日、広東黄埔出港、台湾に寄港、十二月十九日、宇品着、名古屋第一三五連隊に着いたのが二十日です。

休暇を取って懐かしの自宅に帰り、父、母に元気な姿を見せたら非常に喜んでくれました。昭和十九年一月七日、十八年兵の初年兵を連れて門司を出港、一月

十八日、台湾高雄に上陸しました。南方の戦局が危なくなり、船舶輸送も困難になって来た頃ですから一日一日が緊張の連続でした。

昭和十九年一月三十一日、高雄出港、二月四日、九竜に到着、直ちに上陸、沈没の恐れがなくなり心中ひそかに安らぎを覚えました。

昭和十九年二月七日、第一〇八連隊に帰着、初年兵を屈ける任務を果たしホッとしました。留守宅には月五円の下士官手当が送金され、家計にとって大変助かったそうです。

その後、駐屯地周辺地区の治安維持と肅正のための討伐が一年半続きましたが、南方戦局の悪化は周辺地区の現地人にも微妙な変化を与えてきました。共產新四軍の活動も活発になってきていました。

昭和十九年八月、軍曹に進級、主計中尉の下で副々分任官となり給料、食糧、被服の担当となりました。南支仏山、三水、広東等に出張することもありました。

運命の昭和二十年八月十五日、終戦の大詔が発せられ負け戦の実感が全くなく、鳳兵団としても寝耳に水で、一時動揺しましたが人命の下いかんともしがたなく、軍旗の奉焼に続いて武器の引き渡しには小銃の菊の御紋章を削り落しての返納でした。

住みなれた兵舎を出て収容所に入りました。鉄條網はなく四隅に中国兵が監視に立ち、現地人が立ち入らぬよう警備していました。幸い現地人の乱暴もなく石を投げられるようなことは全くなかったです。食糧も量は少なくなりましたが、まあまあものが支給されました。持ち物は決められた物以外は没収されました。

昭和二十一年四月一日、虎門港までの長い道のりを中国兵の護衛のもと歩いて行軍して港に着き、米式リバタイ船に詰め込まれました。

食糧は炒り米が支給されましたが、これを食べてコレラが発生し大変なことになりました。病人の手当てもなしで船中では死亡者が頻発、浦賀に入港できず足止めを食らいました。死体は「ハシケ」で運搬する始

末でした。

一日も早く故郷に帰りたい思いがりましたが、浦賀で一週間足止め、検疫がようやくパスして上陸、故国の土を踏むことができました。

懐かしのわが家に帰ると母は昭和十九年に脳卒中で亡くなっていました。昭和十八年七月、初年兵受領で内地に帰った時に会えたことが良かったと思いました。

弟は昭和十八年現役入隊、満州の泉兵团に入りましたが、その後ルソン島で米軍と戦い戦死しました。

姉二人はそれぞれ嫁いでおりました。終戦後は父の手伝いで農業をやっていましたが、父も亡くなり、現在私は私夫婦と娘に婿養子を取り、孫が男ばかり三人と孫の嫁とで合計八人の大家族で暮らしています。

幸い婿養子が島田材木店を経営し、檜の官材専門として順調に業績を伸ばし、全国的な取引先があり有難い事と感謝しております。

私の軍隊生活の思い出

埼玉県 小屋 喜重

私は昭和十七（一九四二）年十二月十五日、千葉県佐倉市東部第六十四部隊に現役兵として入隊、翌年一月四日、勇躍第一線の中支派遣軍峰兵团独立混成第十七旅団独立歩兵第八十八大隊に配属され、この地で初年兵の教育が始められた。ここは長安という街で、部隊は鉄道警備が主任務である。約六カ月間の初年兵教育後、第一期の検閲も終わり、いよいよ湖南殲滅^{せんめつ}作戦に参加することになった。

初めての戦争参加であり、実戦の経験のない自分たちには、ただ分隊長あるいは古参兵の指揮の言われるままに行動するのみである。私たち初年兵のほとんどは関東地方出身者で、体力も頑健ではなかったためか、初年兵の二分の一は病気になってしまったが、幸い自分は病気にもならず、その後幹部候補生教育を受